

東京農業大学稲花小学校

学校だより【2020年10月19日】第61号



厚木キャンパス・伊勢原農場校外学習

新型コロナウイルス対策で、思うような体験学習ができなかった1学期ですが、2学期からは稲花タイムで畑での学習も再開されるなど、感染防止に気を付けながら学習の枠を広げています。そのような中、年間計画には無かったものですが、10月5日(月)には2年1組が、10月12日(月)には2年2組が、厚木キャンパスと伊勢原農場を訪問する校外学習を、いわば校長スペシャルプログラムとして、実施しました。

感染防止の観点からキャンパスや農場には総入場者数制限があることから、1クラスを2つのグループに分け、交代しながらバスでの訪問となりました。厚木キャンパスでは、農学部藤枝部長、海野課長の出迎えをいただき、デザイン農学科の森元真理先生のご指導の下、「ミミクリーズ」というゲームを行いながらの授業をしていただきました。ホテルの冷光、ハスの葉の撥水など、生き物の持つ様々な特徴をキャラクター化し、カードを使う遊びの中で学んでいきます。子どもたちは院生・学生さんと一緒になって夢中になって遊び、お土産にミミクリーズカードと図鑑もいただくことができました。



厚木キャンパスでの授業風景

また、伊勢原農場では、羽曾部課長や職員の皆さんにお迎えいただき、石川一憲教授にご指導いただきました。甘味料となるステビアを噛んで甘さを味わったり、レモングラスのさわやかな香りを深呼吸したりしながら果樹園まで歩いていきます。(季節のもので、訪問日によって違いますが、カリンの実、タピオカを作るキャッサバ、ソバの花、綿の実などを見せていただいた子どもたちもいました。)果樹園では、リンゴ、ナシ、かんきつ類、カキ、ブドウ、クルミ、キウイフルーツなどの実の付き方、甘いところはどこか、もし、すっぱかったらどうしたらいいかななどを教えていただきます。子どもたちの集中力もさすがのものでした。最後に3人グループごとに分かれ、一人一台ずつのタブレットを使いながら、一番興味をもった作物を撮影しました。



伊勢原農場での授業風景

今回の校外学習では、大学の豊かな教育資源に触れることで、大学や大学農場の魅力を感じさせ、豊かな「感性」を育み、「探求心」を刺激すること、厚木キャンパスでのミニクリーゲームなどにより生き物への「興味・関心」を深めるとともに、説明を聞き、適切な質問をする「傾聴力」や「習得力」を養うこと、さらに、伊勢原農場で栽培される様々な果樹について学び、農作物についての「興味・関心」を深めることやグループで助け合って行動し、タブレットの利用などを通して、自分の考えや意見をわかりやすく伝える「発信力」を身につけることを目的として計画しました。さすが農大稲花小の2年生、実物に触れ、専門家からのお話を聞くことで、深い学びができた様子です。ご協力くださった東京農業大学の皆様にも御礼申し上げます。

【参考】

東京農業大学厚木キャンパス：<https://www.nodai.ac.jp/campus/map/atsugi/>

農学部デザイン農学科：<https://www.nodai.ac.jp/academics/agri/inno/>

東京農業大学伊勢原農場：

https://www.nodai.ac.jp/application/files/3615/5727/6665/isehara_outline.pdf

暑さ寒さに対応できる体づくり

東京農大の榎村修生教授は、環境生理学、とくに暑熱対策の専門家として様々な研究なに取り組んでおられます。榎村教授を通して、昨年に引き続き今年も、熱中症対策用「塩分チャージタブレット」をカバヤ食品様から頂戴し、10月5日(月)および12日(月)の厚木キャンパス・伊勢原農場校外学習(2年生)でも活用しました。さらに10月16日(金)には1年生、2年生の全児童に配布しました。小さな子どもたちは、大人より体温調節がうまくいきませんので、汗をかくとき、また寒くなったとき、それぞれ配慮が必要です。また、子どもたち自身が、汗を拭く、水を飲む、寒ければ一枚着るなど、体の調子に合わせた行動がとれるようになることを願っています。

【参考】

カバヤ食品株式会社：<https://www.kabaya.co.jp/company/>

理事長大澤貫寿先生の特別ミニ講義

10月7日(水)、学校法人東京農業大学理事長大澤貫寿(おおさわ かんじゅ)先生が農大稲花小に来校されました。そして、農大稲花小の子どもたちに、ご自分の生まれた茨城県のことや、茨城県の名産である栗のことなどについて、1年1組から2年2組まで各組で特別ミニ講義をしていただきました。

最初はお月見の話から始まり、秋の収穫に感謝の気持ちを込めて栗や梨などをお供えする習慣に子どもたちも思いをはせました。茨城県で生まれた大澤先生は子どものころ、秋になると毎

朝、お母様に栗を拾ってくるように言われ、お家の周りにある栗の木の下に、栗拾いにいったそうで、その栗をお母様がかまどで焼き栗にしてくださいましたこと、そして、そのホカホカの栗をポケットに入れて、小学校まで通ったというお話もお聞きしました。茨城県は日本一の栗の産地であること、アメリカやヨーロッパなど外国の栗の話、そして、栗の木が堅牢であること、栗の学名にも由来するカスターネットの話まで、子どもたちは姿勢を正してしっかり聞くことができました。

わかりやすいお話の後、一人に一袋ずつ、茨城県産の栗をプレゼントしていただき、子どもたちは大喜び。「お家で鬼皮、渋皮もちゃんと見てくださいね」ということで、早速、各ご家庭では栗ご飯などとして美味しく召し上がったようです。翌日から、「栗ご飯食べたよ!」「皮をむいてみたよ!」と子どもたちからも楽しい報告が相次ぎました。



大澤理事長の特別ミニ講義



大澤理事長からのプレゼント

おめでとうございます 正代関

9月27日(日)、大相撲千秋楽で優勝し、さらに、9月20日(水)には大関昇進が決まった正代関は、東京農業大学の卒業生です。優勝横断幕がキャンパスの内外に設置され、たくさんのお祝いの声が聞こえる中、10月7日(水)には、正代関が農業大学に来学。理事長、学長をはじめ、所縁の人々との歓談がありました。その折、正代関から、農大稲花小の子どもたちへとサイン入りの色紙をいただきました。うれしいプレゼントですね。



正代関は、東京農業大学国際農業学科2年時に学生横綱になるなど、在学中から活躍していました。人柄の良さはもちろんのこと、厳しい相撲の練習だけでなく、東京農業大学の学生としての学業にもしっかり取り組んでいたことは多くの教員の印象に残っています。(校長も、顕微鏡実習などを指導したことが、ちょっと自慢です。)

正代関のますますの活躍を応援するとともに、正代関が、農大稲花小を来訪してくれる日を楽しみにしたいと思います。

農大稲花小教育後援会役員との打ち合わせ

10月8日(木)、教育後援会の役員(朝倉会長含め2年生保護者4名、1年生保護者4名)との打ち合わせをオンラインで行いました。今年度第一段の活動として、10月17日(土)に、昨年も大好評だった世田谷区松原圃場での親子芋堀り体験の打ち合わせなどをいたしました。残念ながら17日(土)は雨と思いがけない寒さのため中止せざるを得ませんでした。教育後援会役員の皆様のご尽力で、24日(土)に再度チャレンジできることになりました。お天気が良いこと、そして、たくさんのお親子が楽しく参加されることを願っています。

新型コロナウイルス感染防止のため、教育後援会についても思うような活動ができず残念なところですが、焦ることなく徐々に、学校と保護者をつなぐ活動ができればと考えています。

事前入試面接

10月9日(金)から、2021年度入試事前面接が始まりました。私立小学校の入学試験としても珍しいZoomを利用した親子面接は、本校でも初めての試みですが、現在のところまで順調に進んでいることをまずご報告させていただきます。

珍しい野菜に注目

伊勢原農場からいただいた、いろいろなナス、そしてナタマメが、今、農大稲花小の図書室前に展示されています。

ナスはインドが原産とされ、古くから日本各地にそれぞれ特有の品種(在来種)が栽培されてきました。また、「親の意見と茄子の花は千に一つの無駄は無い」ということわざなどもあり、親しまれてきた野菜といえます。ナスと言えば紫色が普通ですが、白いナスはナスニン(アントシアニン系色素)がない品種で完熟しても白いままです。また、細長さに驚くナスは「マー坊」という品種で、油がなじみやすく麻婆豆腐にぴったりと聞きました。



ナタマメも熱帯由来の珍しい豆類です。ツルをぐんぐん伸ばして成長が早いこと、豆のさやが巨大であることなどから、「ジャックと豆の木」のモデルともいわれているようで、本校図書室前でも「ジャックと豆の木」の本とともに展示されました。未熟なさやを食用としますが、カレーとともにいただく福神漬にも入っています。



農大稲花小の子どもたちの素晴らしいところは、例えばダイコンを見てもすぐに、品種は何？青首ダイコンですか？などと質問してくることです。新しいナスの品種や珍しいナタマメとの出会いという機会をいただいたことに、感謝ですね。

東京農業大学稲花小学校
校長 夏秋 啓子